

- 目 次 -

はじめに	4
提言の背景 - 現状 -	4
提言の趣旨	5
提言のテーマ	6
第一部 子供を核とした交流	8
第一章 子供間交流の枠組みと課題	10
第二章 交流方法	12
(1) スポーツ交流	12
(2) 子供たちからの国際交流	15
(3) キッズニア浜松	20
第三章 子供間交流の成果と浜松の未来	26
第二部 遊(あそび)を核とした交流	エラー! ブックマークが定義されていません。
第一章 森里湖(もり・さと・みずうみ)のまち、浜松	エラー! ブックマークが定義されていません。
新浜松市・環境遊学都市構想	エラー! ブックマークが定義されていません。
第二章 検証“釣りの聖地・浜松”	エラー! ブックマークが定義されていません。
検証一 . 恵まれた自然条件～ひとつの市でここまでできる～	エラー! ブックマークが定義されてい
せん。	
検証二 . 恵まれた産業条件	エラー! ブックマークが定義されていません。
検証三 . 釣りへの関心度	エラー! ブックマークが定義されていません。
参考資料 浜名湖なんでも釣り大会・参加者アンケート	エラー! ブックマークが定義されていません。
第三章 きっかけづくりは“全国的にも例を見ない釣りイベント”から	エラー! ブックマークが定義されて
いません。	
(1) キーワードは“転戦”	エラー! ブックマークが定義されていません。
(2) 釣りイベントプラス による広がり	エラー! ブックマークが定義されていません。

第四章 そして、更なる可能性へ..... エラー! ブックマークが定義されていません。

(1) 釣りから始まる、親と子のコミュニケーション ” 釣り堀プラン” ..エラー! ブックマークが定義されていません。

(2) 釣りの聖地に必要な施設や環境づくりエラー! ブックマークが定義されていません。

(3) まず市内経済の発展、そして外部発信へ.....エラー! ブックマークが定義されていません。

おわりに エラー! ブックマークが定義されていません。

はじめに

提言の背景 - 現状 -

浜松市は平成 17 年 7 月 1 日に 12 市町村が合併して人口約 82 万人、面積は約 151 千 ha(全国第 2 位)となり、平成 19 年 4 月 1 日には、政令指定都市へと移行することも決まっています。

広域化した浜松市は海・河・湖そして山と全国でも類を見ないほどの自然資源を持っていると同時に合併以前の旧各市町村では昔からの風習、文化・伝統を持っているため様々な行事が行われる特色のある街となっています。また、ブラジル人をはじめとする外国人が多く、登録人数は平成 18 年 4 月 1 日現在で約 3 万人(全人口の 3.8%)と国際色豊かです。中でもブラジル人が多く 1 万 8 千人(外国人登録数の約 60%)で全国の市町村の中では 1 番の登録数となっています。



(平成 18 年 10 月 2 日付中日新聞より抜粋)

産業を見ますと工業、商業、農業、水産業、林業等様々な分野で展開しています。工業では製造品出荷額が 26,167 億円で全国 5 位となっていますが生産業大手のいくつかの企業が相次いで、拠点になる工場を浜松市以外に移すと表明しています。

農業では農業産出荷額が 548 億円で全国第 2 位となっています。水産業は年々漁獲量が減り 20 年前の約 50%となっています。林業においては浜松市の面積の約 68%が森林です。しかし山間部の過疎化、高齢化が進み林業従事者が減っているため森林が荒れ始めています。

商業は郊外への大型店の進出により、旧市町村の従来からあった商店街は活気をなくし、旧浜松市だけを見ても 5 年前の松菱倒産後のあとが決まらず、イトーヨーカドー浜松駅前店やピオラ田町のジョーシン電気の撤退など、様変わりしています。

提言の趣旨

合併した浜松市は自然が多く様々な文化、産業を持っている反面、広域化した分、旧市町村間の意識や考え方、生活について隔たりがあり市としての一体感が感じられません。

今年度の提言では、旧市町村が長年かけて作り上げてきた文化・伝統は守りつつ新市としての一体感を感じられるようなまちづくりを提言していきます。

まず、一体感を感じられる街とはどのようなものでしょう？それは先ず浜松に住む人々が同じ価値観を共有する事ではないでしょうか。

先ず価値観を共有するためには、お互いが知り合うことが必要となります。そこで今回は「交流」をキーワードとして提言を考えました。



提言のテーマ

上記を踏まえ、今年度のテーマは

『新浜松市の遊和』としました。

この「遊和」とは造語です。交流をキーワードとして考えると、その取り組みには様々なアイデアが考えられます。

平成 18 年 4 月より始まった今年度の「まちづくり政策委員会」では 4 月の例会、そして同月に市会議員の方々と交流会を行いその中で色々な意見を出して頂きました。

それらをまとめてみると大まかに「イベント・スポーツ」、「観光」、「行政」、「産業・物産」、「福祉」、「その他」と分ける事ができました。そしてこれらの意見の中から私達青年経済人としての立場から考えられる、まちづくりを目的とした交流について今回は「子供を核とした交流」、「遊(あそび)を核とした交流」の 2 つの方向を考えました。テーマの「遊和」は通常は「融和」と書きますが、今回はイベント(遊び)を踏まえた交流を考えたため、あえて「遊和」と致しました。



第一部

子供を核とした交流

第一章 子供間交流の枠組みと課題

現在の父母世代が子どもの頃、浜名郡可美村は、浜松市の中に位置し、その後平成3年5月に合併しましたが、いまだに"可美村"という意識が強く残っています。それと同様に、平成17年7月の12市町村による合併でも、旧浜北市は浜北、旧天竜市は天竜、その他に旧引佐郡・旧磐田郡・旧浜名郡というように、浜松市という実感が無いと思われます。

浜松市がひとつになるには、まず、子ども間の交流を深め、互いに理解し、信頼関係を一つ一つ築いていくことが近道であると確信しています。

浜松商工会議所青年部は、次世代の浜松市を担う子どもたちによって、共に何かを"行う・作る・遊ぶ"等の交流を通して、人と人の信頼関係を構築し、活力あふれる政令指定都市を実現させることを目指しています。

街の子どもたちと山村の子どもたちが、自然体験、街中の危険(交通事故、犯罪等)などを互いに学びあうことによって、危機管理意識の向上につなげます。



(自然体験例)



(浜松市内交通危険箇所例 元城小近く)

昨今、小学生や中学生のいじめや自殺が起こっています。そこで子どもたちに、同世代の様々な地域の出会いを通じ、新たな発見や環境の違いを身をもって体験させることによって、広い視野で物事を考える力を身に付けさせ、ポジティブかつ思いやりの心を持つ次世代の若者を育てることを目標としています。

浜松市を発展させるも衰退させるも、バトンを引き継ぐ若者(現在の子どもたち)にかかっています。そのため、我々青年部は、子どもの視点に立ち、どのような交流方法が効果的か考え、具体例を第二章で提言します。



第二章 交流方法

(1) スポーツ交流

街づくりの基本は、人づくりが最も重要な課題といえます。ところが、少子化に歯止めがかからず、現状では、学ぶ意欲の低下、体力の低下、ゲームに熱中して友達と遊ばない子供たちの増加、生活習慣病予備軍の増加、ストレスを抱えてキレやすい子供の増加など、様々な問題が生じています。

こうした、子供たちの教育に係る問題は、地域と学校、地域と家庭そして行政が連携して解決しなくてはならない問題です。親世代についても、地域の活動に参加する機会が減少し、地域との関わりが疎遠になりつつあるといえます。子供を核とした交流によって、子供たちの相互理解を深めるだけでなく、地域性の異なる親世代の理解を深めることにもなります。

スポーツは人生を豊かに充実させ、明るく活力に満ちた地域社会の形成のために大きく貢献するものです。

そこで、スポーツによる地域間の交流を提案します。

住民相互の交流が深まり、地域の一体感や活力が醸成されると同時に子供たちの、地域へのアイデンティティが高まり、浜松市への定住志向が高まります。

フェアプレイの精神が養われ、青少年の健全育成が図られます。

ストレスの発散により、生活習慣病の予防になります。



いろいろなスポーツの中でも、例えばサッカーであれば下記の理由により有効と考えられます。

県内でも盛んなスポーツで、競技人口も多く、ルールが比較的単純でわかりやすい。

特別な道具が必要なく、正式な試合でなければ、少しのスペースでもできます。

Jリーグなど上位組織だけでなく、下部組織も充実しています。

ブラジル人を始め、世界の人々との国際交流もできます。

具体的な取り組みとしては、次の項目を考えています。

地域の人が気軽に参加できるスポーツイベントの開催。

市民が大会の企画、運営に携われるようにして、市民の活力を高める。

市の施設を利用したスポーツ合宿の開催。

市内の地域間交流だけでなく、他県等からの合宿客も取り入れ、地域の食材やお土産を紹介し、観光ビジネスにつなげます。

地元各大学との連携。

大学の持つ知的、人的資源を活用するため、教職員や学士が容易にイベントに参加し、取り組めるような環境や仕組みをつくります。公開講座などで、専門の教職員だけでなく、学生にも指導してもらうことで、様々なメリットが考えられます。

スポーツをそれぞれのレベルで楽しむことによって市民の連帯意識が高まり、地域コミュニティが活性化することが期待されます。

(2) 子供たちからの国際交流



浜松市は外国人登録者数が3万722名(人口の3.8%)おり、ブラジル人登録数は日本一です(平成18年4月1日現在)。ちなみに隣の湖西市は3,597名(人口の7.9%)・豊橋市が1万8,577名(人口の4.9%)・他磐田市・袋井市・掛川市・菊川市と、この地域は、よく言えば工業の町が続く日本有数の国際都市となっています。

市内の至る所で普通に外国語(主にポルトガル語)が使われる風景をよく見ますし、行政としても義務教育レベルでは多くの配慮をしているようです。現実に身近な隣人である最大のブラジル人コミュニティと日本との交流もまだまだ改善の余地はあるのではないのでしょうか？

ブラジルは近年BRICs¹(ブラジル・ロシア・インド・チャイナ)の中の一国として脚光を浴びています。地理的に九州・沖縄が東アジアの玄関口として中国や韓国との交流を深め、また北海道・日本海側の地域がロシアとの関係を深める中で、浜松は日本の中でブラジルと最も交流がしやすい立場に有るはずですし、市民としてもこれから国際交流の意識を高める必要があるでしょう。

また、浜松地域には「光技術関連産業集積促進特区」として外国人研究者の受け入れ促進・外国人入国・在留諸申請優先処理が進められています。

1. 経済発展が著しいブラジル(Brazil)、ロシア(Russia)、インド(India)、中国(China)の頭文字を合わせた4ヶ国の総称。

研究者の受け入れについては、これまでの生産現場とは違う面での国際交流も検討が必要ではないかと考えます。

さて、ものづくりの街と言われている浜松市ですが、大規模製造業者の相次ぐ移転に伴い、外国人労働者の働く場所が失われつつあるのが、現状です。

たとえばジュビロ磐田のアジウソン監督やデイドーフナー選手などが名古屋から通勤していました。

なぜでしょうか？

浜松地区には、一部ブラジル人を対象にした学校はありますが、国際的に認められた「インターナショナルスクール」がありません。

せっかく外国からきた優秀な技術者や研究者・プロスポーツ選手が浜松の地に滞在しようとしても、子どもたちが安心して教育を受ける環境は不十分です。家族のことを考えると浜松には住めないというのが現状です。



1-1. インターナショナルスクールについて

インターナショナルスクール(International School)とは、多様な国籍、民族の学習者のための教育機関を言います。通例、特定の国に依存しない教育課程を用い、初等教育や中等教育を行う教育機関を指します。

一方、国際的な教育機関であっても、特定の国籍や民族を対象とするものは、ナショナル・スクール(外国人学校・民族学校)と呼ばれ、インターナショナルスクールと区別されます。浜松に多くあるブラジル人学校はナショナルスクールと定義されるようです。

1-2. 魅力・メリット

.授業や周りとのコミュニケーション

学校生活そのものがすべて英語で行われるために、海外留学と同等の英語力が身につくことでしょう。

.英語圏の文化も吸収できます。

様々な国の子どもたちが集まってくるのがインターナショナルスクールですので、一般的な日本の学校に通うのとは、大きく異なる感覚を得ていくはずで

す。国籍や人種などにとらわれることなく豊かな人間性を形成でき、偏見の少ない国際的な感覚が身につきます。



.自由な風土

日本の学校に比べて、細かい規則、規定は無く、個性が尊重されるような自由な風土があります。

1-3. 問題点・デメリット

.日本の義務教育を受けない

今現状で、考慮しなければならない点としては、多くのインターナショナルスクールは、日本の法律上、義務教育資格とは認められていないということです。

ただ最近では、規制が緩和されたとはいえ、一部のインターナショナルスクールを除いては、まだまだ高校の卒業資格が取得できません。海外の学校へ進学する上では何の問題もありませんが、日本の学校に途中から進学する場合は、厳しいのが現状です。

.費用が高額

インターナショナルスクールは、いわゆる「学校」と違って、日本にある外国企業がお金を出し合って運営しているので、一般の学校に比べて費用が高額になっています。

.日本語や日本の文化を学びにくい

かなり英語漬けで成長していくことになりますので、比較的日本の文化に触れにくいかもしれません。

日本の文化に関しては、子どもがスポーツや芸術といった分野で色々と習得していくと思いますが、日本の教育を受けないため、日本語の使い方や漢字の読み書きなどに関して苦手意識を持つ可能性があります。



.日本人は入学しにくい

在日外国人の子どもが最優先であり、もともと募集枠が少ないため入学には順番待ちという状況がよく見られます。

日本人の場合は帰国子女が優先となります。

入学を希望する場合は、その目的をはっきりさせる必要があるようです。

1-4. 今後の方向性

個性重視のプログラム・英語教育の充実・世界で活躍したいと夢を持っている子どもたちや、国際的な視野を子どもに与えたいと考える方には、インターナショナルスクールで学ぶ事は希望をかなえる近道になるかもしれません。

子どもたちの教育環境を発展させることは国内外から優秀な技術者を集めることに寄与し、ひいては浜松市域の発展に繋がります。

浜松市が国際交流都市として発展することを目指し、子どもたちが国際感覚を身につける場、インターナショナルスクールの設置・誘致を提言します。

資料引用

- ・Wikipedia
- ・国際結婚@情報ステーション
- ・インターナショナルスクール東京ガイドブック



(3) キッザニア浜松

将来を担っていく子供たちに、浜松市についての知識を持ってもらうと同時に、可能性を感じてもらう必要があります。また、浜松市といえば「ものづくりのまち」としての顔を持っており、多くの魅力ある企業があります。しかし、どうしても子供たちの行動範囲では限界があり、自分の学区以外の「企業＝産業」を知る機会というのは限られるのが現状です。そこで、「ものづくりのまち浜松」に住む子供たちに、「ものづくり＝産業」をキーワードにして、浜松市を感じ、体験してもらいたいと考えます。

最近、製造業の浜松離れなどといった報道もありますが、特色・魅力ある企業は浜松にはまだまだ多く有ります。ただ、そのような企業を知る機会というのは、我々大人でも限られていて、ましてや子供たちにとっては、前述のとおり、その機会は狭まると思われれます。また、産業を知るためには、「ただ見る」だけでは、本当の意味での産業を知ることはできません。やはり、「実際に体験する、働く」ことが、産業を文字通り肌で感じるためにも必要なのではないのでしょうか？その意味では、小学校の活動として行っている工場見学等もどちらかという、「見る」という視点が強く、「体験する」という要素が薄いのだと思われれます。やはり、子供たちの社会勉強も兼ねて、実際に大人たちと同じ社会(企業)で働いてみる必要があるのではないのでしょうか？

2006年東京に「キッザニア東京」がオープンしました。そこは、子どもたちが好きな仕事にチャレンジし、楽しみながら社会のしくみを勉強できる、日本発のエデュテインメント(エデュ

ケーション(学び)とエンターテイメント(楽しさ)を組み合わせた造語)タウンです。大人のように、いろいろな仕事をする事でキッズ(専用通貨)をもらい、買い物や習い事などに使えます。キッザニア東京の中には、消防士、キャビンアテンダント、モデル、医師等約70種類の仕事を体験することができます。

実物そっくりのお仕事体験

各パビリオンでは、こども達の年齢や興味に合わせて、さまざまな種類、難しさのアクティビティ(具体的な仕事や体験)が用意されています。パイロットになって飛行機を操縦、アナウンサーとしてニュースを読む、消防士になって消火活動、幼稚園の先生になって小さい子の世話をするなど、大人になりきって遊ぶことができます。



道具からユニフォームまで臨場感たっぷり

本物そっくりなお店や施設が立ち並ぶキッザニアは、まさにこどものための街です。もちろん、大きさも約2/3のこどもサイズ。病院、消防署、ビューティーサロン、銀行をはじめ、ラジオ局、テレビ局、ピザショップ、劇場など、楽しい街並みがこども達を待っています。働く前には、そのお仕事に関連したお話や働く上でのルールが説明され、こども達一人一人に役割が与えられます。ユニフォームに着替え、スーパーバイザーからの説明をよく聞いて、いざお仕事スタート。



働けば、お金が手に入る。自分で貯めたキッズでお買い物！

働いたらキッズをもらってお買い物をしよう！お仕事を体験した子ども達には、キッズニア独自の通貨"キッズ"でお給料が支払われます。キッズを使っていろいろなサービスを受けたり、ショッピングをすることもできるのです。



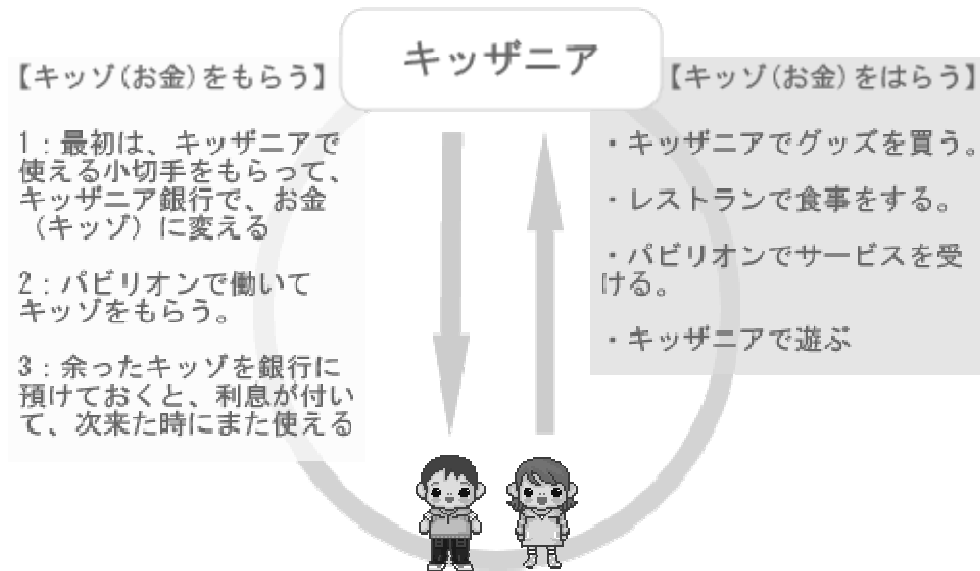
社会を体験する。学ぶ

子ども達は遊びを通して、さまざまなことを学びます。キッズニアは、お仕事体験をベースとした社会学習の場といえるでしょう。遊びの中から社会のルールやマナー、経済のしくみ、将来の可能性を学んでいくことができますのです。



子ども達は様々なお仕事のための社会的役割を理解したり、働くことの楽しさ・厳しさを学んだり、自立性や社会性、金銭感覚を養ったりすることができます。お父さん、お母さんは、キッズニアでの一日を通じて、お子様の楽しむ笑顔と思いがけない成長に目を見張ることでしょう。

キッズニアの仕組み

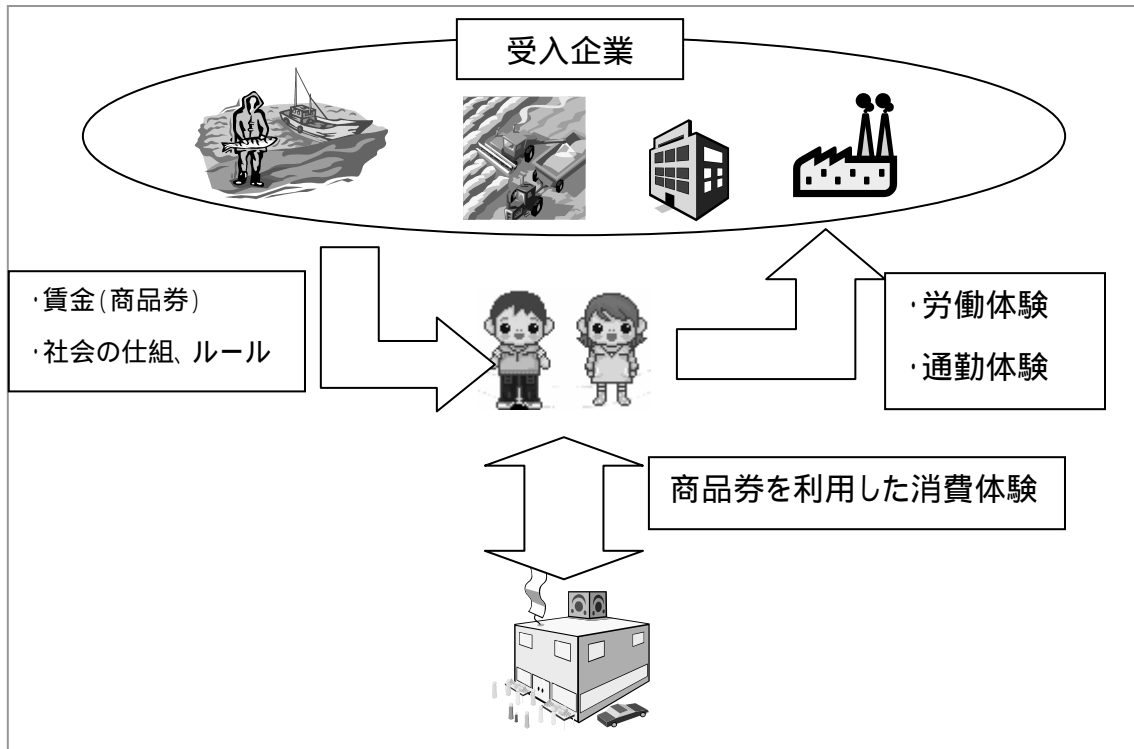


このように、キッズニア東京は、あくまで一つのビルの中での、擬似職業体験ではありますが、その浜松バージョン「キッズニア浜松」は、浜松市で実際の企業での職業体験をすることを目的としています。

具体的な方法としては、主旨に賛同いただける企業を募集し、こどもたちの夏休み等の長期休暇のある一期間を利用して、それらの企業に実際に子供たちを派遣します。ここでいう企業とは、製造業だけではなく、農林水産業・サービス業等浜松市にある企業すべてを含むこととします。そこでは、子供たちの出来る範囲で、仕事をやってもらいます。原則、大人たちと同じ出勤時間・就業時間で、働いてもらい、通勤も体験してもらいます。企業は、働いた対価として、商品券をあげます。子供たちは、その商品券を持って市役所(又は会議所)に行けば、賛同いただいた企業の商品を購入することができるようにします。

この様に、「実際に会社で働き、その対価をもらい、それにより消費する」という大人にとっては当たり前の社会での活動を子どもに体験してもらうことが、この提言の大きな目的です。

<キッズニア浜松イメージ>



「キッズニア浜松」を実現することにより、子供たちは、当然多くの産業を体験する機会を持つことができます。実際に、その企業にて働くことにより、通勤による広域化した浜松市も併せて知ることが出来ます。そして、企業での経験は将来の就職選択時にきっと役立つことと思われます。また、短期間でも企業で働くことによりルールの重要性や社会の厳しさ等を肌で感じ、今後の人間形成の面からも役立つかと思われます。そして、子供たちが浜松の企業の素晴らしさを通じ、浜松市の魅力を感じてもらうことが、何より将来の役に立つことだと思われます。

また、子どもたちを受け入れる企業を公表することで、社会貢献の面からのアピールにもなりますし、また、将来を担う子供たちに企業を知ってもらうことは、長期的な雇用対策の一環にもなると思われます。

そこで私たちは、キッザニア東京の浜松市バージョン、「キッザニア浜松」を提言します。

第三章 子供間交流の成果と浜松の未来

交流をテーマにしたいろいろな提言でしたが、いかがだったでしょうか？

今、この瞬間から考えて出来ることから、行政、教育関係、ボランティア団体、NPO 法人の方達の支援をいただきながら進めていかなければいけないこともあります。

もちろん、皆さんがすでに考えていたことかもしれません。

私達の幼少時代を思い出してみてください。小学校時代の友達と遊んだことや、家族を中心に育まれた兄弟、親子の絆、家庭の行事のことがあげられます。

大人になった今、知り合いと共通点を見つける会話の際に、古き良き時代のことを語れる自分がそこにいるのではないのでしょうか。人間形成の基礎となる年齢は、おおよそ小学校高学年くらいまでには、ほぼ構築されると感じています。

最近の、社会現象の様々な事件は、基本的な人と人との交流の無さからくる自分さえ良ければいい！他人を思いやる事が出来ないことから、致命的な結果を生むのではないのでしょうか？「小さいときから彼は知っている、彼女は知っている」という関係を一人でも多く持つことが出来れば安心して生きていけると思います。

浜松と合併した 12 市町村との交流は、始めの一步としてではなく、相互の経済、教育、文化、芸術の流れを活発的に推進するのが、浜松商工会議所の使命であります。そして新浜松市の外堀の囲いの向こうを覗くと、東三河、南信州、われわ

れ遠州との交流(三遠南信)が必要不可欠となっています。政令指定都市浜松は、海、川、山をもつ豊かな自然をかかえながら、世界に誇る工業都市でもあり、ハイテク産業の研究者、技術者、国際色のある人間達が存在し、生活しているところです。その中で育っていく子どもたちには、勉強や遊びを通じて出来るだけ本物と多くふれあう機会を経験させたい。

物質的に豊かな時代を育ってきた我々が、実現してきたビジネス環境を、これからは精神的な豊かさを実現するための環境として活用できる時代に来ています。我々に課せられた課題は人間としての価値観を子どもたちにどのように伝えたいのか？どのような地球を子どもたちに遺したいのか？本当に生きることの喜びと辛さ、厳しさと優しさ、人としての賢さと愚かさをどのように教育していきたいのか？そういった観点をふまえ、世界のビジネスを動かせるトップリーダーを、ひとりでも多く、今の時代は必要としているのです。

そんな人材がいつも浜松から育ってくれたらいいですね。そして世界からも注目され、産業経済の発展と人間形成は浜松に学べと言ってもらえるようになればと思い、子どもを核とした交流を提言させて頂きました。

資料出典元一覧

《静岡県》	光技術関連産業集積 促進特区について (静岡県企画部)	http://www.pref.shizuoka.jp/kikaku/ki-26/documents/hikari.pdf
《企業・ その他》	キッズニア東京	http://www.kidzania.jp

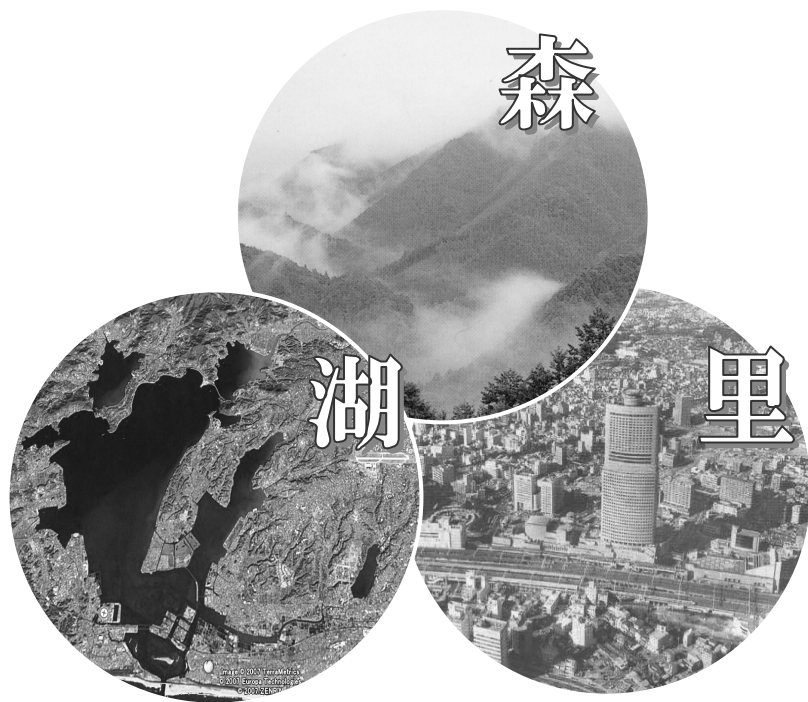
第二部 遊（あそび）を核とした交流



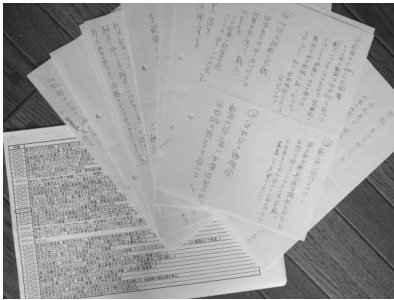
第一章 森里湖(もり・さと・みずうみ)のまち、浜松

広域化した浜松市は、単に大きくなったということだけではなく森里湖(もり・さと・みずうみ)という、他に例を見ない自然資産を多く持っています。そして、長い歴史の中で、それぞれの地域では自然に合わせた住まい方や文化を作り上げてきました。そうした文化の違いがあることは大変良いことであり、今後求められるのは、頭で習うより体感を通じて山側、街側が相互理解することが、浜松市を一体感のある政令指定都市にするために不可欠な要素です。

ところが最近では、前述したように山間部の過疎化・高齢化が進むなど、次世代の担い手を失いつつある地域が増えています。さらに市内においては多くの大工場が移転し、“楽器の街”や“オートバイの街”という意識が、徐々に転換期を迎えていく中、新たなまちづくりの核が無いことに対する危機感も高まってきました。



このままでは各地域にある文化や経済、そして自然資源が荒廃してしまい、広域化したのはいいが、一極に人口が集中する偏重した浜松市が出来上がってしまいかねません。また、森里湖を抱えている浜松市は、そうした自然資源をりっぱに次の世代に引き継いでいくことも責務です。



※四月より重ねられたグループディスカッションでは数多くの意見が寄せられました。

今期4月、「同じ価値観の共有」そして「交流」をキーワードに、委員会内や市議の方々を交えての活発な意見交換がされた中、我々が痛感したのは、例えばイベント等を通しての、新市の統一を図ろうとした場合、従来のような“市中心部の一箇所に人を集めてのイベント”は、中心部から遠く離れた地域においては、少なからず疎外感が出てしまうことは否めない。さらに“ただ各地域の祭りを一箇所に

集結させただけのイベント”では、文化の違いもあって感情移入がしにくく、統一感に結びつけるのは難しいのではないか、という問題でした。

新浜松市において、できるだけ広い地域に参画意識を持たせられるまちづくりの核の提言、さらには、その起爆剤となる事業の構想が必要であると、私たちは考えました。

さて、森里湖の文化を結び付け、できるだけ広い地域に参画意識を持たせられる為には、どうしたらよいか。これには人が行き来し、お互いを理解することが必要です。

ではどうしたら森から里、そして湖へと人の流れを創れるか？そのアクションプログラムのひとつとして我々は今期、ひとつの構想を提言します。

新浜松市・環境遊学都市構想

我々が、新たにまちづくりの核を検討するにあたり、熟慮したのは以下の五項目です。

- ①. できれば、他の自治体にはない独自性のあるもの
- ②. 浜松市域に既にある産業を生かしたものであること
- ③. 年齢や性別・文化の制限がなく、より多くの市民が関心を持つものであること
- ④. 森から里、そして里から湖へと人を動かすことができるものであること
- ⑤. 親子のコミュニケーションや情操教育、そして自然への意識向上等も視野に入れたものであること

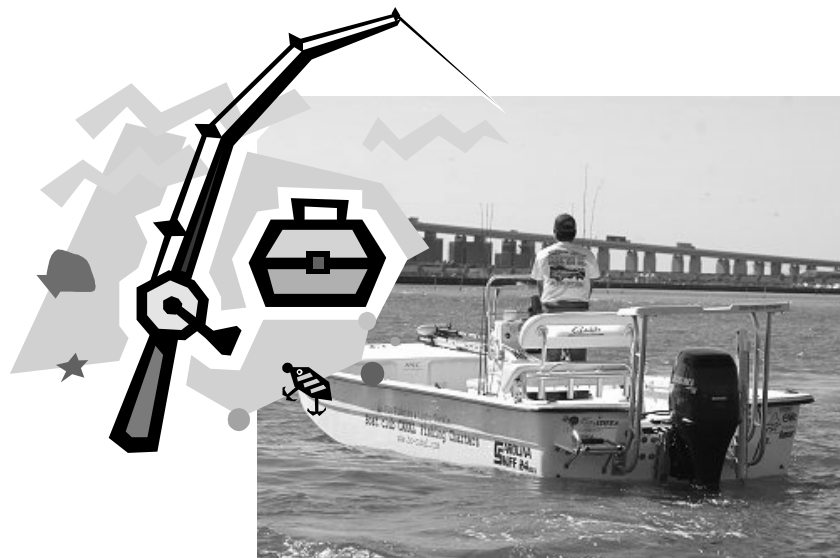
これらの点を意識しながら、委員会内から出た意見等を見直したとき、ある委員から出された『釣り大会の開催』という言葉が目にとまりました。

これを先ほどの五項目に当てはめて考えると

- ①. 湖・川・海と、あらゆる釣りが楽しめる浜松市。中でも浜名湖という汽水湖を抱えたこの市にあって、これだけの条件がひとつの自治体にすべて揃っている地域というのは、他に類がないのではないだろうか。
- ②. 市内にはスズキやヤマハ発動機など、大手船外機メーカーの工場がいくつかあることはよく知られているがそれに加え、有名なルアーメーカー等も市内に存在している。浜松市域における世界的な釣り関連産業には、どのようなものがあるのか。
- ③. 楽器やオートバイと違って、釣りは特殊技能がなくても楽しむことができる。年配の方から子供、女性に至るまで幅広い層の愛好者がいるのではないか。

- ④. 例えば『渓流釣りが好きな方が、海釣りも楽しんでいる』とか、その逆に『ふだんは浜名湖で釣りを楽しんでいる方が、鮎釣りにも興味を持っている』といった、交流の可能性はないのか。
- ⑤. 「子供の頃、親に連れられて釣りに行った」という、我々の世代の多くが持つ思い出。釣りに馴染みのない親世代にも、釣りを指導し親しむ場を提供することで、それを親子のコミュニケーション等の材料にできるのではないのか。

我々の中で以上の仮説が立ち、これらをクリアすることで、“釣り”は新たなまちづくりの核となりうるのではないか、という結論にたどり着きました。この提言では「浜松市は釣りの聖地となりうるのか」という仮説の立証から、その起爆剤となるイベントの構想、さらには見込まれる経済効果などをまとめていきます。



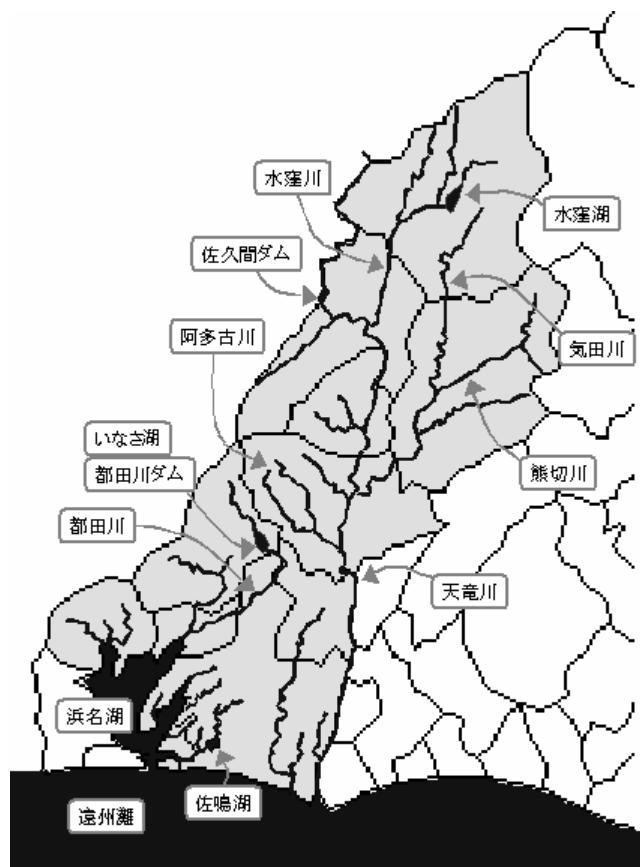
第二章 検証“釣りの聖地・浜松”

検証一. 恵まれた自然条件～ひとつの市でここまでできる～

—海・川・池そして汽水湖。それぞれの恵み—

①他に例を見ない水資源を多く持っている都市

浜松市は、森林資源103千ha・耕作農地9千ha、そして、『海(遠州灘)』『川(天竜川・都田川等)』『湖・池・沼(浜名湖等)』という多様な水資源が揃い、他に誇ることが出来る自然を数多く持った都市です。水資源は市全域に分布しており、昔から余暇・産業・教育等の場として地域に親しまれてきました。環境省の調査(H5)では、全国60の特定湖沼・魚種564種データの内、浜名湖は357種で第一位、佐鳴湖も73種で第五位と全国に誇れる種の生息が確認されています。



②多様な水資源から得られる水産物とその現状

【特定湖沼の魚類相】

(環境省 自然環境局 第4回<平成5年> 基礎調査 湖沼調査報告書 一部 抜粋)

成因	断層湖				カルデラ湖				海跡湖			造跡湖		魚種別の湖沼計								
	富栄養	中栄養	貧栄養	酸栄養	富栄養	中栄養	貧栄養	汽水	汽水	汽水	富栄養	中栄養	貧栄養	富栄養	貧栄養	十不含	十含					
湖沼型Ⅰ	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	汽水	汽水	汽水	富栄養	中栄養	貧栄養	富栄養	貧栄養							
湖沼型Ⅱ	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名	湖沼名							
科名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名	魚種名							
ニシン	ニシン															4	5					
(イワシ)	マイワシ															3	5					
アユ	アユ	○	◎	+	+					◎	○	◎	○		◎	20	28					
ワカサギ	ワカサギ	◎	+	+	◎	+	◎	◎		◎	◎		+	◎	+	+	◎	◎	41	50		
コイ	ウグイ		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎			36	38		
	タナゴ																◎		6	10		
ウナギ	ウナギ	○	○	○	○						◎	○	○		+	○	○		40	43		
	オオウナギ																		1	3		
サヨリ	サヨリ									○	○	○	○	◎					11	14		
アジ	マアジ									○			○						3	4		
	ブリ												○						1	2		
タイ	クロダイ									◎	○	◎	◎						11	12		
	キチヌ												◎						1	1		
ハゼ	ヨシノボリ	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎				+	○	+		◎	◎	28	34		
	マハゼ										◎	◎	◎	◎			○		15	18		
コチ	コチ(マゴイ)												○	◎	◎				5	6		
ヒラメ	ヒラメ												◎	◎					5	7		
カレイ	イシガレイ									○			◎	◎					6	6		
	タカノハガレイ									○			◎	◎		○			7	8		
フグ	クサフグ										○	○	◎	◎					7	8		
	トラフグ									○			○						4	5		
サンフィッシュ	ブラックバス		◎	◎	◎	○		◎				◎	◎				○		20	20		
シュ	ブルーギル		◎				◎					◎	◎						9	9		
確認された事の有る魚種の計		18	17	57	19	30	16	26	10	22	14	50	70	73	57	357	38	6	40	24	全564種	
特定湖沼の魚類相 順位													5	1								全60湖沼

◎→天然繁殖、○→聞き取りによる生息確認、+→今回確認されなかったが記録にあるもの

(付則説明) 上記は、湖沼数 60、魚種科名 145科・魚種名 564種の基礎データの中から、不作為に抽出したデータに基づき作成したものです。

【浜松市 漁獲高】 市町村単位では正式な統計は無い為、参考

魚種	浜松市 HPより抜粋					推移
	H12	H13	H14	H15	H16	
コシロ	32.0	17.8	20.4	19.3	14.8	↓
イワシ	0.4	0.1	0.1	1.0	0.5	
ウナギ	11.5	9.9	12.9	14.8	17.8	↑
シラスウナ	1.0	1.2	1.0	1.1	1.5	
アナゴ	5.4	1.0	2.1	2.5	1.3	↓
サヨリ	4.1	1.7	1.9	1.8	2.5	↓
ボラ	32.1	34.1	24.9	17.9	7.7	↓
スズキ	38.1	33.5	39.2	60.9	50.7	
キス	0.8	2.3	1.3	1.9	1.7	
タイ	16.4	15.8	10.0	18.2	15.5	
マハゼ	32.5	25.2	39.4	29.7	27.0	
雑ハゼ	5.4	4.8	0.6	5.8	0.0	
マゴチ	1.7	2.1	1.0	2.8	2.6	
カレイ	4.6	2.0	4.3	5.2	6.0	
クルマエビ	25.0	22.6	25.7	15.0	22.5	
クマエビ	3.8	10.3	13.9	8.4	15.7	↑
ガザミ	8.8	17.3	15.1	11.3	15.0	
ノコギリガザ	4.6	3.9	5.1	5.7	6.0	↑
雑エビ・カニ	25.5	38.2	32.2	19.7	19.0	↓
その他	57.0	67.0	48.3	52.5	55.0	
主要20種	310.7	310.8	299.4	295.5	282.8	↓
アサリ	2,305.6	2,693.0	3,226.8	2,887.1	3,847.1	↑
主要20種	2,616.3	3,003.8	3,526.2	3,182.6	4,129.9	↑
生ノリ	250.4	255.4	268.0	243.9	302.8	
板ノリ(千枚)	15,214.0	16,669.0	16,484.0	10,057.0	11,355.0	
カキ	75.2	60.5	60.0	34.3	31.7	↓

このような水資源に存在する様々な魚類・甲殻類・水辺の動植物から、私たちは多くの水産物を得てきました。遠州灘や浜名湖(海水が混じる汽水湖)では、鰻・アサリ・ハゼ…、天竜川等の河川では、ハゼ・アユ・ウグイ…、また飼育・放流(アユ・ヘラブナ・クルマエビ等)や、養殖(すっぽん等)の活動も各地域の団体で広く実施されています。あまり知られてはいませんが水窪湖のワカサギ、こちら

は有名な浜名湖のノコギリガザミ(ドウマン)などは、浜松市が他に例を見ない多種多様な水資源を多く持っている都市としての証です。



しかしながら全国的な傾向として、近年水産物自体は減少傾向にあり、今後もこの傾向は続く予想されます。要因としては、佐鳴湖に代表される水質悪化や、水辺に集う人々のマナーの悪さ・経済性優先の護岸・ダムによる砂浜減少などの生態環境の変化があげられます。

浜松市は自然水資源や多種多様な水産物に恵まれた都市であること。そして環境保全活動の促進が急務である事を改めて実感する事ができます。



検証二. 恵まれた産業条件

① マリン関連企業、施設が集結

浜松市内にはヤマハマリン(株)、スズキ(株)、本田技研工業(株)、マーキュリー・マリンジャパン等、舟艇・船外機メーカーとその関連会社やトップクラスのルアーメーカー、メガバス(株)等、世界中で多くのファンを獲得しているマリン関連企業が集結しています。ちなみに平成16年の世界各国から輸出されている船外機のうち、およそ80%が浜松企業の手によるものというデータもあります。まさに“ものづくりの街・浜松”の本領発揮、といったところでしょうか。

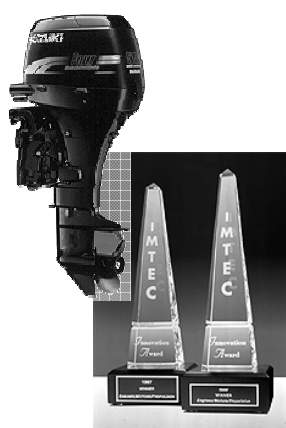
また浜名湖にはマリーナが15ヶ所、市内にはこの他にもマリンレジャー関連施設、ホテル等が数え切れないほどあり、比較データはありませんが、湖・海・河川に恵まれた環境から、マリン関連施設の集積度も非常に高い都市といえるでしょう。

② 環境に対する高い企業意識

さらに上記の企業は、皆共通して環境問題に対する高い意識を持ち、特に「水」についての環境保全意識を企業レベルで啓蒙するなど積極的な活動を続けています。

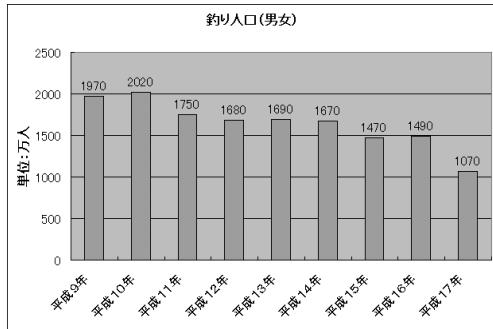
研究開発分野では「ものづくり精神」が発揮され、低燃費・低排気・低騒音の4ストロークエンジンの進化を実現。米国のボートショーでも各社が相次いで大きな賞を受賞しています。生産分野でもゼロエミッションを達成するなど、大きな企業努力を行っています。

さらには、草の根レベルでの清掃活動や放流会を実施するなど、市民と共に行う環境保全活動を積極的に行い、環境を守ろうという意識を強く持ちながら、それぞれの立場や方法で



活動しています。

検証三. 釣りへの関心度



財団法人社会経済生産性本部が発行するレジャー白書によると、釣りに親しむ人口は、年々減少しつつあるとはいえ平成17年は全国で1070万人あり、釣具の市場規模は平成に入り常に2,000億円を維持しています。同財団による余暇活動への参加希望調査でも

釣りは人気が高いことから、団塊の世代が大量に退職する今後も日本最大級のレジャー産業である事に変わりはないでしょうし、自然・産業条件ともに恵まれている浜松市は、特にニーズが高いと考えられます。

私達青年部に身近な釣り関連のイベントとして、浜松商工会議所の恒例事業『浜名湖なんでも釣り大会』があり、平成18年には142名の参加がありました。



この他市内に本社を置く釣具販売の(株)イシグロでは、鮎の友釣り大会等を毎年開催し、毎回60名程度の太公望が腕を競っているようです。



ルアーメーカーのメガバス(株)も『いなさ湖を楽しむ会』(ウォーキング・写生・写真撮影会・バス釣り大会・釣り教室)を行なっています。

天竜川漁協では、鮎の友釣り大会を年2回(参加者は50名前後)、そしてルアーやフライの釣り大会も年2回(参加者は100～150名)と、純粹に釣り好きな人を増やすための、地道な活動が続けられています。

自然の川をそのまま
水窪
山間に歓声



**捕まえたヤマメを友人と
見せ合う子どもたち—浜松
市水窪町の釜川**

水窪町の釜川で開かれ
た、十二回目を迎える今
回は約千人が来場する盛
況ぶり、子どもたちの
歓声が山間に響き渡っ

用した日
た。
川を若で併
つた特設会
約三千
匹のヤマメ
軍手をはめ
号令と同時
岩陰を探つ
を浅瀬に追
て楽しんだ
援が三十
協会など後
水窪町観光
ン塾主催
ほれワンフ
大会(二
つかみどり
本一ヤマメ

(平成 18 年 8 月 1 日付静岡新聞より抜粋)

また釣り大会ではありませんが、水窪町の『日本一ヤマメつかみどり大会』(水窪町「ここほれワンワン塾」が主催し、水窪商工会などが後援)には、長野県境の山間部に毎回1,000人もの方が集まります。なんとかヤマメを捕まえようと川の中でずぶ濡れになりながら父子が歓声を上げている横では地元の食材を紹介・販売するテントに母親が列をつくるなど、この大会は地域活性化に大きな役割を果たしています。

どのイベントも浜松まつりのような大量集客の期待はできませんが、『釣り』は季節を通して、思い立った時に、誰にでも楽しむことが出来る、手軽なレジャーであるからこそ、多くの方が親しむのです。福利厚生の一環として釣り大会を年に一度くらいは開催している企業もあることでしょう。すべての釣り大会への参加者を合算すればきっと浜松まつりにも負けない参加者となるはずです。

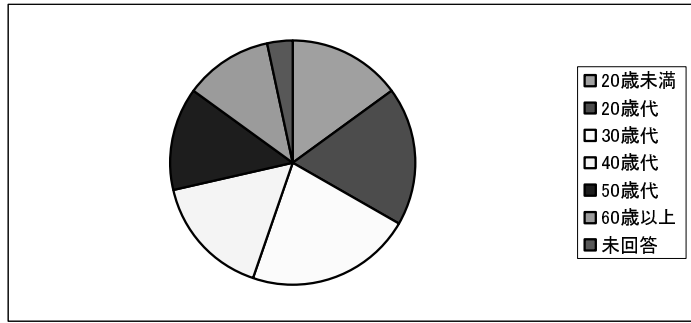
以上の通り、浜松市は自然的にも、産業的にも、『釣り大会』を開催する事に関しては申し分ない条件を有している事がわかります。

参考資料 浜名湖なんでも釣り大会・参加者アンケート

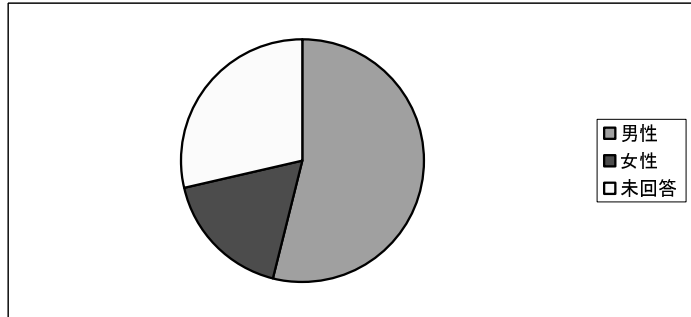
10月15日(日)浜名湖なんでも釣り大会参加者142名
 (87名の参加者の方にアンケートにご協力戴きました。)

Q1.あなたの年齢・性別について教えてください。

20歳未満・・・13名
 20歳代・・・16名
 30歳代・・・19名
 40歳代・・・14名
 50歳代・・・12名
 60歳以上・・・10名
 未回答・・・3名

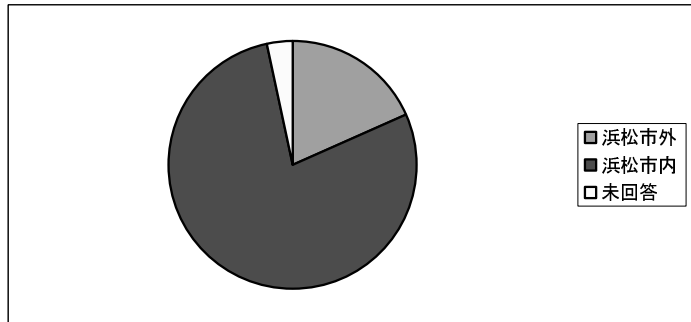


男性・・・47名
 女性・・・15名
 未回答・・・25名



Q2.あなたのお住まいになっている地域はどちらですか。

浜松市外・・・16名
 浜松市内・・・68名
 未回答・・・3名



Q3.以下の釣りのうち、興味のある

釣りがあれば点をお付けください。

(複数回答可)

外洋・船釣り・48名

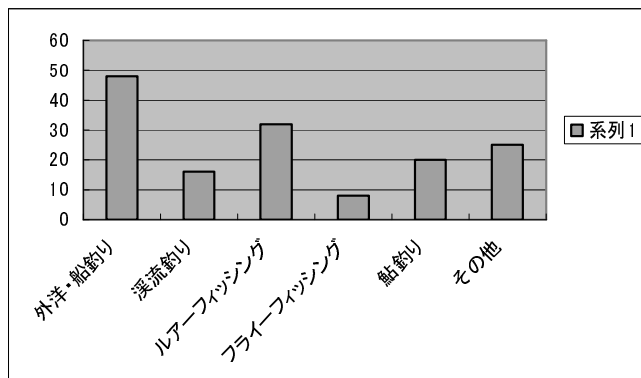
溪流釣り・16名

ルアーフィッシング・32名

フライフィッシング・8名

鮎釣り・20名

その他・25名



Q4.浜松市内には、他の釣りの名所も数多くありますが、市内で溪流や海釣りの大会が開催された場合、参加したいと思いますか。

①ぜひやってみたい・・・54名

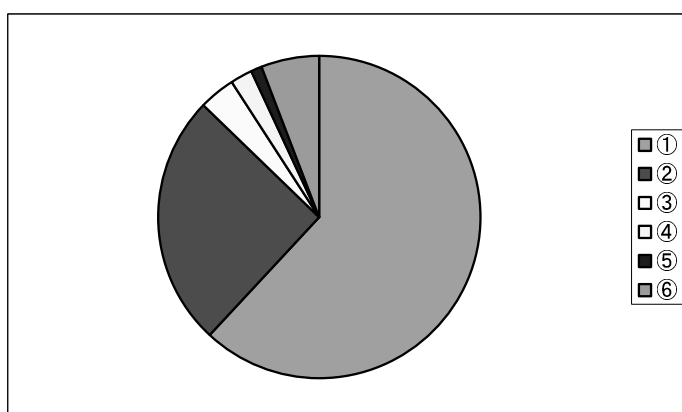
②やり方を教えてもらえるのなら、やってみたい・・・22名

③釣ったことはあるけど、大会にはあまり興味がない・・・3名

④他の釣りにはあまり興味がない・・・2名

⑤その他・・・1名

⑥未回答・・・5名



第三章 きっかけづくりは“全国的にも例を見ない釣りイベント”から

(1) キーワードは“転戦”

私たちの世代の多くは、子供の頃父や祖父に海や川へ釣りに連れて行ってもらったものです。もともと釣り場環境として考えると静岡県は、非常に恵まれている地域です。その中でも浜松市は、合併し、広域化したことによりひとつの自治体で楽しめる釣りのバリエーションが拡大しました。

旧浜松市として考えますと汽水湖である浜名湖、外洋の遠州灘が考えられますが、合併したことにより友釣りに適した鮎釣り地域を持つ天竜川、気田川に代表される溪流釣りが出来る河川や、冬季にわかさが釣れる水窪ダムなど一般に考えられる釣りの種類の多くが一つの市内で出来るという全国的にも例を見ない環境を手に入れました。

しかし釣りには、えさ釣りやルアー釣り、毛針釣り等々数々の手法があり、一言に釣りといっても全く違う物であり、すべてに精通している人はいないのではないのでしょうか。ただ前述のアンケート結果の通り、多くの人は違う釣りにも少なからず興味を持っていると言えるでしょう。



そこで一例として、“オールラウンダー・フィッシャーマンズ フェスティバル(以下 AFF と略す)”と銘打って、浜松市内を転戦し、いろいろな場所でいろいろな釣りを楽しむ、全国的にも例を見ない釣りイベントを提案してみます。

Round.1 7月中旬 増沢池(都田) へら鮎釣り

Round.2 7月下旬 天竜川 鮎友釣り

Round.3 8月中旬 いなさ湖 ブラックバス ルアー釣り

Round.4 8月下旬 中心市街地 フィッシングゲーム

Round.5 9月中旬 浜名湖 なんでもえさ釣り

Round.6 10月中旬 気田川 アマゴ フライフィッシング



この“AFF”の最大特徴は、市内を転戦していくということです。釣りは、当然その場に行かなくては出来ないものですから、参加者や見学者とその家族またはスタッフまでも、広域化した浜松市内を行き来することになります。そこが地域を知ってもらうまたは知るきっかけとなります。また、一箇所集中で行う事業と違い、地域間の格差が少なく、参加意識を向上させ、特色が出しやすいこと、市内中心地よりも郊外が主役になる事も大きな特徴です。

前述のように自分が普段する釣りとは、違う釣りをするきっかけにもなり、釣り愛好者も、より釣りのおもしろさを感じ自分自身の新たな釣りの世界が開けるものと考えられます。

また未経験者も、釣り教室を同時開催することで、釣りの面白さを肌で感じ、楽しむきっかけとなることでしょう。

加えて、環境保護を考える上でも、また「みんなで気持ちよく釣りを楽しむ」という意識を啓蒙するためにも、マナー教室の同時開催も必須といえるでしょう。

さらに時流を反映して、実際の釣りでなく、バーチャルなゲームでの一戦を混ぜることでより釣りというものに興味がない人達の関心を引き、より多くの参加者を得、そこから本当の釣りへの移行を促すことができるのではないのでしょうか。ゲーム会場の直ぐ横に仮設の池を作って、実際の釣りが体験できるようにするとさらに臨場感があって良いかも知れません。

やはり子供の参加ということを意識し、夏休みを中心とした日程とスタンプラリー形式の転戦釣りイベントとし、“AFF”に参加するだけで広域化した浜松市を体感することができるシステムとすることが重要であると考えます。



さらに大きな仕掛けとして、現在東京と大阪でそれぞれに開催されているフィッシングショー（釣具の見本市）と国際ボートショーをこの“AFF”開催時に浜松で行うことが出来れば全国的な注目が集まり、より多くの参加者や支援者が集まるのではないのでしょうか。

会場は、浜名湖ガーデンパークをメイン会場に各川や湖などにサテライト会場を設け、即実践に移

れるフィッシングショー及びボートショーとして開催すれば、他の自治体では、出来得ないものになるはずです。

現在東京・大阪ともに各4万5千人程度の来場者を誇るこのフィッシングショーと来場者4万人程度のボートショーを誘致できれば、単純な経済効果を考えても莫大なものがありますが、その後リピーターとなって浜松にフィールドを求めにやってくれば、その効果は、計り知れません。開催回数を重ねていけば、「釣りといったら浜松」という“釣りの聖地・浜松”となることは、明白です。

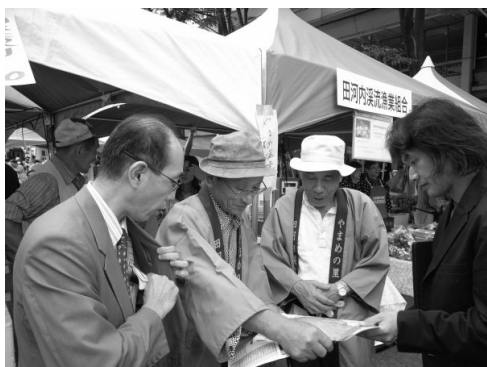
(2) 釣りイベントプラスαによる広がり



この“AFF”での最大の特徴は、前述のように広域化した浜松市を転戦していくということです。参加者等の多くの人々が各地区に出向くことになり、行き来をすることになります。実際にイベントが行われない地区でも人々が通過したり、近くを通ったりすることはあります。この浜松市内を浜松市民が行き来するということが、重要で価値があることなのです。

”今まで行ったことがなかったから知らなかった“と言われる良い場所や地場産業などが各地区には、たくさんあるものです。それが、必然的に各地区に人が来ることにつながるのですから、各地区自慢の数々を”AFF“会場内でブースを設置したり、周辺交通機関廻りなどでアピールをしたりする大きなチャンスとなるでしょう。

(H18.9.30 浜松秋穫祭の会場にて
田河内(たごうち)溪流漁業組合の方と)



例えば農作物や水産品等の特産品は、浜松市全体での地産地消をより促進させることになるでしょう。また観光産業として観光スポットを核に食・泊・観などをトータルにアピールできれば、釣りと相まって週末の手頃なレジャーとしてもリピーターが多くなるはずです。

さらに多くの企業にとっても自社業務や製品等の PR が出来る格好の機会です。

さらに各地区の特産品を使った“ご当地餃子コンテスト”などのサブイベントを組込んで、より特産品の PR をしやすくするなどの仕掛も有効かも知れません。

また家族で“AFF”に参加しても中には釣りに興味がなく、あまり乗り気がしない方もいるでしょう。一般的に考えると女性は、その傾向が強いのではないのでしょうか。釣り→魚とくれば“食べる”と連想するでしょう。釣った魚のさばき方から本格的な料理方法までを教える料理教室を開催してみるのはいかがでしょうか。たとえばお父さんと子供は釣りをし、お母さんは料理をして待っている。料理をすることもまたコミュニケーションの手段となり、情操教育にもなります。当日“AFF”で一緒になった家族同士と一緒に料理をし、食卓につくということも思い出になることでしょう。それが自然環境のよい場所でしたら、尚のことです。

“ものづくり”の楽しさを知ってもらう意味で、特に子供を対象とした手作りルアー教室や竿づくり教室などを開催。いわゆる竿師や浮き師といわれる古くからの釣り道具づくりのプロに実演・指導をお願いし、本物のものづくりの大切さやすばらしさを体感することで、“ものづくりの街・浜松”の伝承も行っていければすばらしいことでしょう。

このように釣りから広がるさまざまなことを同時に開催することで、人それぞれの楽しみ方を見出すことができ、釣り単体だけではない参加者の増加を見込むことができるのではないのでしょうか。このようにいろいろなコラボレーションが可能な点も釣りの魅力のひとつです。



第四章 そして、更なる可能性へ

(1) 釣りから始まる、親と子のコミュニケーション ” 釣り堀プラン”

小学校ではスポーツ教室という形で月に何回か体育館を一般開放し、卓球やバドミントンを家族で楽しんでもらおうという催しを実施している所があります。これにはスポーツを通して、子供達の健全な育成、そして親子のコミュニケーションを図るという目的があるわけですが、同じ事を「釣り」でもできないでしょうか。例えば、シーズン外の小学校のプールを「釣り堀」として開放してみるというのはどうでしょう。

「釣り堀」は人工の池に魚を放し、お客さんに「釣り」を楽しんでもらう施設です。もちろん天然の川や海には敵いませんが、ちょっとした時間に釣りを楽しみたい、自作の仕掛けを試したい、という人には絶好の練習場です。



今、浜松の子供達が「釣り」をしてみたいと思っても、家の周辺に川や湖が無ければ、「まあ、いいかゲームもあるし」で終わってしまうのが関の山です。親御さん達が余程熱心に誘わなければ子供達が「釣り」に「目覚める」機会はなかなか訪れません。

しかし、自分達が日頃通っている小学校のプールが「釣り堀」になったらどうでしょう。

小学校という正に日常空間に出現する「釣り堀」。釣り道具はスポーツ教室の様に現地で貸してもらい、身一つで「釣り」が楽しめる。そうなれば、家族や友達同士で誘い合って「釣り」というものを一度やってみようという事になると思います。



そこで大事なのが人生の先達たる親御さん達です。全く「釣り」経験のない子供達からすれば「釣り」のやり方、まして「生き物」たる魚の扱い方などまるで分かりません。「釣り」を教えるリーダー的存在が必要となるわけです。

学校の「釣り堀」で肩寄せ合って糸を垂らし、家族のアドバイスで魚を釣り上げる。「お父さん、お母さん、すごいね！」という昨今あまり耳にできない言葉を聞く事が出来るかもしれません。

また、「釣り」に「目覚める」と魚を釣る為に様々な勉強が必要になってきます。忍耐強さも必要になってきます。「いのち」に対する認識も必要です。そして喜びを分かち合える仲間も必要になります。「釣り」という行為で子供達が行得るもの、子供達を育てる家族が行得るものは正にスポーツ以上なのではないでしょうか。

「釣り堀」運営に関しては、毎週各校持ち回りで開催すれば、各校年1回の負担ですみますので、スポーツ教室同様、PTAや校区体育振興会の方に協力をお願いできると思います。また、持ち回りで行なう事で子供達が色々な学校に「釣り」に出かける事になり、自分の学区以外の「浜松」を体験し、且つ、「釣り」を通して「浜松」全体に友達をつくる事も可能になるのです。

先行して、親御さん専用「釣り教室」の開催も合わせてお願い致します。

「釣り」を教えるべき親御さんにとって「釣り」の機会が無いのは子供同様、予備知識なしで事に当たっては恥を掻くだけです。そこで「釣り教室」を開催し、釣りのプロ、釣り同好会の方の指導の下、「釣り」の基礎を学んでもらいましょう。そこで得た腕前を基に子供達と「釣り」を楽しむ。子供達の尊敬を勝ち得、親子の密なコミュニケーションを図るには是非合わせてお願いしたいところです。(なお、学校のプールを使った「釣り堀」は過去、三方原小、富塚小などで実施された実績がある事を申し添えておきます)

(三方原小学校のプールにて、釣り大会が催された当時の記録)



(村櫛小学校 釣りクラブの活動)



(2) 釣りの聖地に必要な施設や環境づくり

釣りの聖地というからには、重要なことはまずその情報発信です。釣りは、前述のように多くの種類がありますし、自然の中ですることですから毎日のように状況が変化していきます。これを多くの人達に正確に早く知らせることが大切です。インターネットという手法も当然有効ですが、やはり活気ある現場情報は重要なことですので、情報発信基地を設置したいところ です。

できればメイン基地は、浜名湖周辺に置き、全情報発信と初心者への釣り教室やマナー指導等ができることが重要であると考えます。当然各釣り場近くにもサテライト基地を設け、現場の生情報をお知らせすると共に、広く“釣りの聖地 浜松”をアピールするために浜松駅他 JR 駅や東名 IC・SA などにもサテライト基地をおくことが出来れば外から来浜した方への宣伝効果は絶大であるので、なお有効であると思います。このような施設は、廃校や旧役場の一部などを利用し、係員は、シルバ一人材や地域の釣り名人などをお願いできればさまざまなメリットが見込め、また各地域の活性化にも一翼を担うこととなるでしょう。

前述の釣り教室などのためにインストラクターの養成も必須項目であると考えます。(社)全日本釣り団体協議会では、水産庁からの助成により平成4年から公認資格「釣りインストラクター」を創設し、平成9年からは、フィッシングマスター(上級釣り指導員)の資格認定をおこなっています。このような制度を活用しながら、インストラクターを養成し、一般には浜松独自の“級制度”を制定し、これが出来たら“3級フィッシャーマン”などと続けていく楽しみができればより釣りが生活や文化

に根付くことになると思います。

釣りイベントの一環として前述した料理教室やものづくり教室を続けていける環境も必要であると思います。

上記のように釣りを真ん中において、人々がコミュニケーションする・考える・働く・知る、という施設や環境の整備が必要であると思います。釣りというひとつのレジャーを通して、人が人と信頼関係を築き、お互いに成長していく。それが長い時間を掛けて、生活や文化となり根付いていくことが出来れば、そこは“釣りの聖地 浜松”です。



(3) まず市内経済の発展、そして外部発信へ

さてこれまでの章で、キャッチフレーズを「釣りの聖地・浜松」と掲げることによって、分かりやすさと気軽さをアピールしてきたわけですが、その情報発信によって他県から人を呼び込むことも市内経済の発展には大切な活動です。それでは、「釣りの聖地」というキーワードには、どのような可能性が秘められているのでしょうか？

まず、これまでの章でも述べられてきた通り、釣りという娯楽そのものが内包している要素を最大限に活用するだけでも、次のような効果が考えられます。

①.環境意識の向上

例えば川や海・湖にごみを捨てていくという行為は、魚の生活域を脅かしていくということ、そして釣りを楽しむ人たちにとっては、釣りを楽しめる場を減らしていくことに結びついて行きます。自分が楽しませてもらった場所を大切に守る、というごく当たり前とも言える認識が、自然環境への距離感をぐっと身近なものにし、環境保全への意識を高めていきます。

②.親と子、そして子供同士のコミュニケーション

親子のコミュニケーションの希薄化、そしていじめの問題など子供同士のコミュニケーションの浅薄化が叫ばれている昨今、釣りを通じて共通の話題を持つことは互いのコミュニケーションを図る上で、十分な力を発揮することでしょう。



ただ“魚を釣る”という共通の目的に向かって、漫然と釣り糸を垂れて待つ。そしてどちらからともなく会話が始まり、コミュニケーションが生まれる。実は会話など無くても、自然に一体感が生まれてくるものなのかもしれません。

③.“いのち”の教育と食育

視察を続けていく中、天竜川漁協で伺った子供たちのサツキマス放流体験の話が印象に残りました。ビクビクと動く魚が怖くて触れられない子供たち、そしてその魚たちを自然へと送り出すときのなんとも言えない感動。子供たちから寄せられたお礼メッセージの分厚い束も見せて頂きました。

我々は命あるものを食べて、生きているんだという実感。これを子供のうちから体感させておくことは、その後の人格形成や情操教育にも必ずや良い影響をもたらすことでしょう。



(放流体験をした子供達から、漁協へ寄せられた感謝のメッセージ)

④.釣りの持つ、“いやし”の効果

昨今、人の肌表面の角質を好んでついでむ希少な魚“ドクターフィッシュ”を用いた新しいリラクゼーション治療『フィッシュセラピー』が一部で注目を集めているようです。

人が人として生きていくための心のゆとり。そして母なる自然に抱かれ、誰にもせかされること無く、ゆったりと過ごす自分の時間。学術的な検証結果は得られませんでした。魚と人間の関わりには現代人が忘れてしまいがちな人間性を回復する効果、そして癒しの効果があるのではないかというのは、誰も想像に難くないところです。

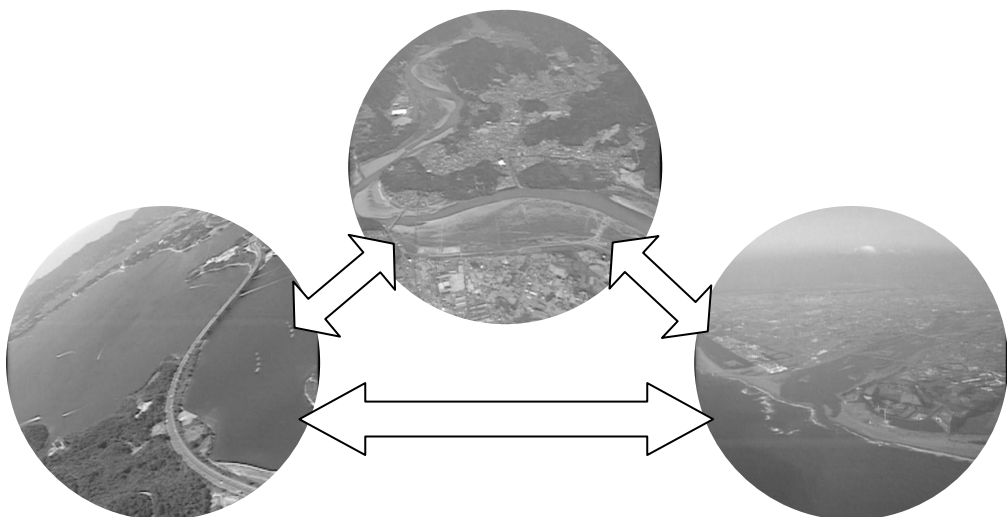
以上の可能性に加え、今回の構想に基づき、浜松市全域が活性化すれば、以下のような効果も見込めます。

⑤.全浜松市民が北から南、南から北へと互いに行き交うことに因る、市内経済の活性化

北遠の方々にお話を伺ってみると気づくことなのですが、数年前から徐々に道路が完備されたことによって、北遠地域から浜松市街地へ気軽に出かける人は多くなり、地元の商店がますます不利な状況に追い込まれているようです。

これはすなわち、『ただ道路を整備してだけでは、山間地域から市街地へ流出する人口が増加するだけでその逆が増えることはない。ひいては過疎化に拍車をかけてしまうのではないか』ということの意味しているのではないのでしょうか。

その場に行かなければ楽しめないレジャーがあることによって、市街地から山間部、山間部から市街地へと、およそ 80 万人ともいわれる全浜松市民が市内を行き来するきっかけとなる。これだけでも、相当な経済効果をもたらすものと予想されます。



⑥.その独自性の高さに因る、マスメディアへの波及

顕在化してはいませんが、1983年に終了した釣り漫画『釣りキチ三平』が近年、平成版と銘打って再開されたり、漫画『釣りバカ日誌』が映画シリーズ化もされていたりと、静かにではありますが、釣りを題材とした物語は依然、根強い人気を保ち続けているように思います。そんな中であって、今回の提言として挙げた『他には類を見ない釣りイベント』そして『全市を挙げての釣り聖地化構想』はマスメディアにとって、かなり魅力の高いものに映るのではないのでしょうか。

漫画『釣りバカ日誌』において、主人公が浜松で釣りをする場面が描かれる、そして映画のロケ地に選ばれる。また、そこまで大規模なものでもなくとも、例えば『TVチャンピオン』（テレビ東京）等のテレビ番組において競技化されるなど、今回の提言の一部内容が、全国区でのマスメディアの注目を集める可能性は、決して低いものではないと私たちは考えていますし、そのためのアプローチも今後進めていく予定です。

⑦.外部発信そして観光的魅力の向上

前述のように、全国規模のフィッシングショーやボートショーを誘致できれば、数万人単位の来場者が見込めます。釣り愛好者の心理として、評判の良い釣り場があれば多少の遠隔地でも出かけていくという心理はあるようですし、ましてや都心からも交通の便の良い浜松市にあっては、その心理的ハードルもかなり低くなると考えられます。前述したマスメディアへのアピールやフィッシングショー会場の誘致等が実現した暁には、まず(1)全国から釣り愛好者が集まる → (2)愛好者が“釣りの聖地・浜松”を知り、市内各地へ釣りに訪れる → (3)口コミ等でさらに全国へ広まる という好循環がもたらされま

す。これは、観光産業という面から考えても、相当アピール度の高いものと言えるのではないのでしょうか。

以上はあくまでも仮定の話ですが、日本全国のどの自治体よりも、ここ浜松市はそれだけの条件を備えていると確信しています。ターゲットは西遠地域や静岡県全域といった限られた地域ではなく、日本全国の釣り愛好者すべてであり、それらの方々に『浜松へ行きたい！』と思わせることだと私たちは考えています。



⑧. 団塊世代の活躍の場として

ただ単に「釣りの聖地」をアピールするのではなく、その活動の担い手を集めることが「釣りの聖地化」構想を実現に導くうえで大切なことです。その一翼を担う強力な助っ人として、団塊の世代の方々が考えられます。多くの経験や知識をもった人生経験豊かな多くの方が、第二の人生を模索し始めます。何も収入ばかりではなく世の中の役に立ちたいという思いが大切な原動力です。また、マルチハビテーション¹という住まい方にも大変な興味を持っていると言われます。高度成長期に

1.【multi-habitation】一つの世帯が複数の住居をもち、必要に応じて住み分けること。
複数地域居住。

は、競って都会へ向かった地方の働き手たちは、第二の人生を目の前にして、今、失いつつある自然(地方)に回帰しようとしています。マルチハビテーションとは、都市と地方に生活の場を設けることですが、別荘がそこにあるということではなく、活動の場がそこにあるということが大切です。自分が地域に必要とされて始めて田舎に行くことを楽しみにするのではないのでしょうか？そうした視点を見失わないことです。釣りの指南役に、帰農の担い手に、環境教育の先生に団塊の世代を呼び込むことは、大きな力になります。こうした特別な思いや動機を持った担い手が、浜松の人々を触発し、多元的な社会を構成していく可能性があります。雇用対策にも一役買ってほしいものです。



【視察先並びに調査先】

《国》	環境省	http://www.env.go.jp/
	農林水産省	http://www.maff.go.jp/
《静岡県》	静岡県	http://www.pref.shizuoka.jp/
	静岡県水産試験場 (浜名湖分場)	http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/
《浜松市》	浜松市	http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/
	農林水産部	
《その他団体》	浜名漁業協同組合	http://www.hamanagyokyo.jp/
	天竜川漁業協同組合	http://www3.ocn.ne.jp/~tenryu-r/
	浜松商工会議所	http://www.hamamatsu-cci.or.jp/
	天竜市商工会	http://www.shizuoka.com/hokuen/tenryu/
	水窪町商工会	http://www.shizuoka.com/hokuen/misakubo/
	春野町商工会	http://www.shizuoka.com/hokuen/haruno/
	(社)全日本 釣り団体協議会	http://www.zenturi-jofi.or.jp/
《企業・その他》	メガバス株式会社	http://www.megabass.co.jp/
	株式会社イシグロ	http://www.ishiguro-gr.com

取材にご協力いただいた皆様(アイウエオ順)



株式会社インシグロ様



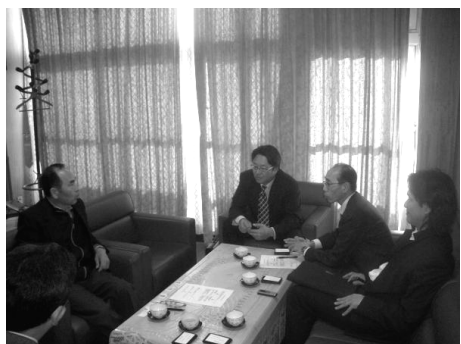
静岡県水産試験場 浜名湖分場様



天竜川漁業協同組合様



天竜市商工会 青年部様



浜名漁業協同組合様



春野町商工会様



水窪町商工会様



メガバス株式会社様

おわりに

今年度のキーワード「交流」を考えた時、いろいろな意見が出ました。交流の内容だけでなく、「対象者をどうするのか?」、「交流の場をどうするのか?」、合併した浜松市は広域化し人口も増えました。その分選択幅が広がったことにより多くのアイデアが出るようになりました。今回色々な意見をまとめながらテーマを絞っていった中で感じた事は様々な交流を行うことで自然を守り、命の尊さを再確認し、家族の絆や友情を強めていく、そしてルールを守るつまり老若男女共、あらためて道徳を学ぶ機会がより増えるのではないかということです。

ここ数年ニュースでは「犯罪の低年齢化」、「悪質ないじめ」、「家族内の虐待」、「幼児の絡む犯罪」が頻繁に出てきます。また「耐震偽装」、「汚職」、「飲酒運転での惨事」等多くの事件が話題に挙げられます。これらを見ますと先ず今までの常識や道徳心が無くなってきているように感じられます。核家族化、少子化、そしてTVゲームや携帯電話の普及などにより「自分さえよければ」という自己中心的な考え方が多くなり「隣は何をする人ぞ」的な他人に干渉しない風習ができています。以前は町内会の行事が多く、大人から子供まで顔見知りだったことであまり道から外れたことをする人がいなかったように思われます。家族の団欒、近所付き合い、町内会等色々な交流があり「向こう3軒両隣」「遠くの親類より近くの他人」的なコミュニケーションが取れていたのです。さらに「はじめに」でも書いたように浜松市は外国人登録が多い街であり外国人による犯罪も多くなっています。外国人の多くは同じ国の仲間どうしで集まる傾向が見られます。この状況では自国では通用しても日本では通用しないといったことがわからないままで生活するの

で外国人と日本人の常識の違いがはっきり出てしまいます。これからは国の垣根を越えて交流することでお互い分かり合うことが必要です。そうすれば日本での常識も理解されて彼らにしてみても暮らしやすい環境になると思います。

また、最近の「ニート問題」そして今年から始まる「団塊の世代問題」についても少なからず解決策が得られるのではないのでしょうか。

平成19年1月1日付の中日新聞に「浜松市 団塊世代の就農支援」の記事が出ていましたが、今後交流事業を行うに当たり山村での活動や農業体験などでは指導者が必要となります。また釣りでも「釣りインストラクター」を取得してもらった団塊世代の方々に各交流の指導員、サポーターとして活躍してもらおうことも考えられます。

このように交流によって「道徳」の再認識から始まり犯罪抑制、就業問題などにも一石を投げられると信じています。

今年度の提言書の意見はほんの一例です。これをきっかけに「交流」をさらに考えて実践していくことで本年、政令指定都市になる浜松市がより発展していけると考えます。

最後になりましたが、この提言書を作成するに当たり、各方面の多くの皆様方より御支援・御協力、を賜りましたことを紙面上ではございますが厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。